

# 扇や通信 '09 秋・冬号

安達太良山が一年で一番、近くに来る季節がやって来ました。晩秋から冬の間は、かつきり大気が澄みわたり、山々が誰にも見えない夜のうちに、そつとこちらに歩いて来たかと思つほど、すぐ近くに迫つて見えるのです。雪を頂いた美しく雄大な安達太良を間近に

眺めるのは、この季節ならではの楽しみの一つです。また、近くの小さな山々は、冷え込む朝はうつすら雪がつもり、砂糖をふりかけたお菓子のような愛らしい姿を見せます。

木々が葉を落として、しんと静まった森は、死んでいるではありません。枝々には、春に萌える芽の赤ちやんが、固い殻に守られて育っています。

落ち葉が積もつてふかふかになった森の小道を歩いてみて下さい。森の息づかいが聞こえてくるはずですよ。

そして、寒い季節の格別の楽しみは、こんこんと湧くいで湯。冴えわたる

月と星を眺めながら、ゆったり露天風呂につかった後は、扇やが腕をふるった山の幸・里の幸のお料理と地酒をご堪能くださいませう。スタツプ一同、心からお待ち申し上げております。

扇や女将 鈴木 亜矢

## 椀出しの清水のお話



村人は恐れおののきましたが、次の年の田植えの時期も大雨が降りやまず、また川が大暴れして、村は水浸しになったのです。村は相次ぐ洪水ですつかり荒れ果て、人々は大切な種籾まで食べ尽くしたうえ、木の根や草で飢えを凌いで、ようやく命をつないでおりました。

その川の、村で一番上流にあたる山際に、小さな家があり、十七歳になる又造と両親がくらししておりました。又造の家はろくな田畑もなく、炭焼きと川魚の漁をくらしの支えにしておりました。又造の父親は漁の名人として遠い町まで知られていましたが、その息子の又造も父親の血を引いて、漁の腕がよく、二人が捕る魚はいい値段で売れました。

### お膳とお椀が出る泉

昔、安達太良の裾野の小さな村に、不思議な泉がありました。何が不思議と言つて、村の家々で祝言や法事があつて、ふるまいのお膳とお椀が欲しい時にお願すると、十人分、二十人分と、必要な数だけお膳、お椀、小鉢などの一揃いが水底から浮いてくるのです。村人は喜んでそれを使い、用が済むと丁寧に清めて借りた数を揃えてまた泉に返します。ですからこの泉は、椀出しの清水とよばれておりました。この泉は、村を貫いて流れる川が大きい



くうねつてできたもので、水底からこんこんと清水が湧き出ており、村人は、竜神がここから椀を出してくれると信じておりました。

ところがある時、借りたお膳とお椀

を返さなかつた者がありました。ふるまいの膳の一揃いを借りる時も返す時にも、月のない暗闇の晩と決まつていたので、誰がそんな不届き者かわかりません。このあいだ法事をやった与作か、祝言をやった留吉か、村人は額を寄せて噂しあいましたが、何の証拠もなく、誰だかわからないままになりました。

「何かたたりがなければいいが…」とみんな心配しましたが、案の定、刈り入れも間近という時に、三日三晩大雨が降り続き、川が氾濫して、稲田は流れてしまいました。

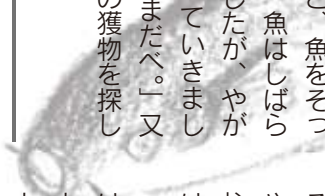
「やっぱり竜神様が怒つたんだ」と

しかし、洪水に打ちのめされた村の人々が生きるのがやつとでは、魚など売れず、交換に買う米も麦もありません。又造の家も困り果ててしまいました。

「おれがとびきりでかい魚を捕つて、町のお大尽様に売つてくる」と、又造は漁にでかけました。すると、又造を待つていたかのように、上流の水底に大きな魚がいました。普通、魚は人の気配がすると矢のように逃げてしまうのですが、又造が胸の高鳴りを抑えながら網を投げる体勢になつても、魚はじつと動きません。

魚はあつけなく網にかかりました。引き寄せてみると、四尺は越える鯉で

す。「これは高く売れるぞ」又造はわくわくしましたが、ふと気がつく、様子が変です。こんな大きな魚を捕ったら、網が破れるほど大暴れるものなのに、魚は口をパクパクするだけで横たわっています。又造はぴんときましました。魚の口を開けてみると、奥に太い釣り針が刺さっています。「これでは痛かったべ、苦しかったべ」又造は慎重に釣り針を抜き取ると、魚をそつと水に放してやりました。魚はしばらく水底でじつと急流を上っていますが、やがてゆうゆうと急流を上っていきま



### 竜神を尋ねて

ことの深刻さに二本松城の殿様も心を痛め、沢山の人足を出して頑丈な堤防を築く工事をしましたが、あらかた出来上がる頃にまた大雨が降り続き、堤防が崩れ出しました。

そこで村人たちは、祈禱師を呼んできて拜んでもらったところ、「竜神様が怒っている。その怒りを鎮めるには、人柱を立てるしかない」と言っつのです。人柱とは、生きた人間をお供えすることです。村人たちは肝をつぶしました。誰が人柱に選ばれるかわかりません。祈禱師はしばらく祈り続けると、後に控えている村人をふりむき、「その、その娘じゃ」とひとりの若い娘

を指差しました。娘はみよといい、村一番のきりょうよしと評判でしたが、まだ十五になったばかりでした。

みよは驚きと恐怖の余りその場に倒れこんでしまい、両親も泣き崩れてしまいました。みんな気の毒でたまりませんでしたが、「村のためだ。ここはがまんしてくれ」という長老の言葉にしん、とうなだれるばかりでした。その時、「いや、女子にそんなことはやらせてはならねえ。俺が代わりに人柱になってやる。」と前に進み出たのは、又造でした。

村人はまた驚きましたが、「背に腹は代えられねえ。みんなのためだ。」と言いつつ、又造を人柱に立てることに決めました。

その晩の真夜中、その時がやってきました。又造は、ふと深く山刀をしのばせて、大きな麻袋に入りました。村人が袋の口をしつかり結ぶと、濁流に投げ込みました。祈禱師が大声で祈り、その後でみんなが手をあわせていました。又造を入れた袋はたちまち見えなくなりました。

さて、又造は、小さい時から川で鍛えたつわものです。浮きつ沈みつしながら刀を取り出し、麻袋を切り裂きました。あとは、やまめや岩魚のように泳げる又



造の思いのままです。濁流をなんとか横切つて岸にたどり着きました。あたりは真っ暗でどこに流れついたのか見当もつきませんでした。川沿いにひたすら歩いて、夜明け前によく人家が見えるところにさしかかりました。温かい火の前で体を乾かしたいのですが、村の誰かに見つかったら大変です。藪にかくれて休んでいます、押し殺したような人声があります。「ここらへんに着くんぞねえが……」うん、流れがここで大きく曲がるので、たいがいはここさひつかかる——それは、みよとその家族でした。それなら安心です。又造は藪から這い出しました。みよと兄と弟、両親が泣きながらいつべんに又造を抱きしめました。

みよ達は、遺体となって流れ着くだろう恩人又造を、この岸ですくい上げ、ねんごろに供養しようと待ち受けていたのです。

人柱になつて死んだはずの又造は、村人に顔を見せるわけにはいきません。しばらくみよの家にかくれていることにしました。しかし、いつまでもそうしていても、先がみえません。「竜神様にお詫びするために人柱になったんだから、今度は本当に俺がお詫びに行つて来る。」と言いつつ、川から上がった

て五日目の夜中、又造は竜神がいるといわれる水源めざして発つていきました。沢を上り、何度も岩を飛び越え、深い藪を掻き分けて、ようやく水源にたどり着いたのは、昼過ぎでした。くたくたになった又造は、やわらかい落ち葉の上に横になってひと休みしました。秋も終わりの山の木々はすっかり葉を落とし、枝の向こうには輝くように青い空が広がっています。遠い鳥の声を聞きながら、又造はうとうととしてしまいました。

### 夢の家

どのぐらいたつたのでしょうか。きじが鋭い鳴き声をあげていきなり藪から飛び立つ音で、又造ははつとして起き上がりました。水源に祀られているという竜神様の祠を見つけて、お参りしなければなりません。あちこち歩き回っているうちに、何百年という歳を重ねた大きなぶなの大木の根元に大きな穴を見つけました。「ここかな？」又造が中をのぞきこむと、その穴は深く奥に広がっています。おそろおそろの中に入つてみると、その先は細い道になつていました。そこを先に進むと、まぶしい光が見えてきました。もっと進むと、目の前に絵のように美しい小さな村の景色が広がっていました。稲田が金色に光り、青空の下で沢山の人が忙しそつに稲刈りをしていました。あせ道では子ども達が笑い声をあげて走

り回り、家々の庭先には、赤いけいと  
うや、黄色の小菊が咲き乱れ、猫がの  
んびり昼寝をしていました。きれいな  
川がさらさらと流れていて、水がたま  
る岸辺では、おばあさん達がいそいそ  
とお膳やお椀を洗っています。

「甕神様のお堂はどこですか？」又  
造がたずねると、おばあさん達は無言  
のまま笑顔で、森の方を指差しました。  
又造がその森に入ると、目の前に小



さな家がありました。「こんにちはー」  
と声をかけても、何の応答もありま  
せん。「甕神様にお詫びにきましたー」  
と叫んでも、しんと静まり返っていま  
す。戸口に耳をつけて中の様子をうか  
がくと、なんともいえないおいしそ  
うな匂いがしてきます。ずっと何も食  
べない又造はたまらなくなつて、戸  
に手をかけると、ずりりと開きました。  
中に入ると、いろいろの火が燃え、その  
脇にお膳があります。お膳には、栗ご  
はん、きのこ汁、岩魚の塩焼き、里芋  
の煮物、菊の酢の物がきれいに盛り付  
けてありました。又造はもつがまん  
で、きなく、そのごちそうに箸をつけ

した。おいしくて、おいしくて夢中  
たべるうちに、ご飯の椀はたちまちカ  
ラになりました。お代わりしたくても  
誰もいないので我慢しながら汁を飲ん  
で、ふと気づくと、ご飯の椀がまたい  
っぱいになっていきます。不思議に思  
いながらも、又造は遠慮なく四杯もお代  
わりしました。

おなががいっぱいになると、又造は  
お参りがまだだったことを思いだし  
て、近くにあるらしいお堂をさが  
しました。奥に伸びている家の次  
の部屋の戸を開けると、お膳とお  
椀がきちんと天井まで積み上げ  
られていました。よく見ると、そ  
れは、又造の村で前にみんなが借  
りていたお膳とお椀です。さらに  
次の部屋に入ると、庭があり、開  
けながら進むと、目の前は大き

な滝です。ごうごうとつなりをあげて  
水が落ち、滝壺の上には美しい虹がか  
かっています。その滝壺をのぞきこ  
んだ又造は息を呑みました。水底に大  
きな鯉が銀色のうろこを光らせて、ゆ  
つたりひそんでいたのです。「おめは  
あの時の鯉だな、元気でいたんだな。  
よかつたよかつた。」又造が声をかけ  
たその時、突然耳をつんざくような雷  
が鳴り、ごおーと風のような音がし  
たと思つと、滝壺から巨大な竜が天め  
がけて昇つていきました。  
又造は、呆然としてそれを見ていま  
したが、はつと我に帰ると、その場に  
ひざまづいて両手をあわせておりまし

た。竜の去つていった滝壺にはいちだ  
んと鮮やかな虹が輝いていました。

### 不思議のお椀

どのぐらい時間がたったのか、体が  
冷え切つて又造は目をさました。  
晩秋の日はすっかり傾いて、冷たい山  
風がふいています。「ああ、しくじつた。  
寝ちまつて、夢の中でお参りしつちま  
つたなあ。また後でお参りにくるべ。」

—又造は夕闇が迫る山道を降りて、ふ  
もとのわが家に帰ることにしました。  
沢を下りながら、又造はふとどこに何  
か固いものが入っているのに気がつき  
ました。「あれ？なんだべー」見ると、  
お椀が一つ。さつき夢で食べたご飯が  
入っていたものと同じ、黒い漆塗りの  
お椀です。

わけがわからないまま、そのお椀を  
抱いて、又造はようやくわが家にたど  
りつきました。

息子が人柱になつて死んだと思つて  
嘆き悲しんでいた両親は、「幽霊が出  
た！」と驚きましたが、わけを聞いて  
その場にへたり込むほど安堵しまし



た。しかし、村の人達に何と言ひ訳し  
たものか—親子は頭を抱えてしまいま  
した。

疲れきつていた又造は、「まあ、今  
夜のところは、寝るべ。」と、ふしぎ  
なお椀をいろいろ端に置いて、床につき  
ました。

明くる朝、又造は母親の驚く声で目  
をさました。「大変だ、お椀に米  
があふれてくる！」—見ると、お椀い  
っぱいに米が湧き出て、米びつにそれ  
をあけると、また米が出てきます。そ  
うしているうちに米びつがいっぱいに  
なりました。米はそれから湧き続け  
て、家中の入れものをふさぎました。  
「この米、みんなに分けてやつて、人  
柱のことはかんべんしてもらつてべ。」  
と又造は心をきめました。

その日から又造は、村中に米を配つて  
歩きました。みんな涙を流して喜びま  
した。「甕神様からもらつた米だ。」と又  
造がいうと、みんなふしぎがりながら  
も川に向かつて両手をあわせました。

又造の家の米びつはそれからもいっ  
ぱいになり、その米を村中で分け合つ  
て食べて、人々はようやく元気を出し  
てきました。覚悟していた川の氾濫も  
びたりと治まり、村もだんだん元気を  
取り戻しました。

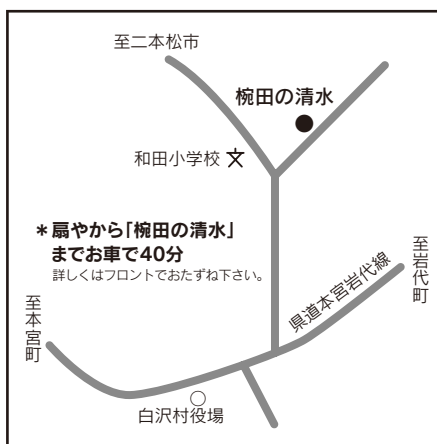
### お椀との別れ

そして秋が来て、村の田んぼの稲は  
しつかり実つて重い穂をたれました。



人柱の縁で想い合うようになった又造とみよは、村中に祝福されて祝言をあげることになりました。めでたい日を明日にひかえた昼下がり、又造は高い丘に立つて村をながめました。稲田が、青い空の下で金色に光り、みんなせつせと稲刈りに精を出しています。あぜ道を子ども達がぎやつきやつとはしゃぎながら駆けまわり、家々の庭先には色どりの小菊が咲き乱れ、猫が気持ちよさそうに眠っています。川はゆつたり流れ、岸辺でおばあさん達にここに何かを話しながら、お膳やお椀を洗っています。―又造は息を呑みました。それは、自分が竜神のほこらの先で見た風景ではありませんか。

「ああ、竜神様が守ってくれてんだなあ。」又造はやおら川辺に下りて行き、ふところからあの不思議な椀を取り出すと、そと椀出しの清水の水面に浮かべました。「竜神様、おかげで俺らは、これから自分の力でいい村を作れます。だから、もうこのお椀の助けは借りなくても大丈夫だ。このお椀は返します。」―又造が手を合わせると、お椀はくぐくぐと回りながら川



を下り、まもなくすうつと沈んで見えなくなりしました。

それから村には大きな災害も起きず、のどかな村として、ずつと続いていきました。お椀の話聞いて遠くの村や町から、竜神のほこらを探しに水源に行く者も絶えませんでした。みんな沢に滑り落ちたり、深い森に迷ったり、熊に襲われたりして、命から戻ってきたといっています。

長い年月がたつて、川はいつしか消えてしまい、椀出しの清水だけが残りしました。その清水はいつしか「椀田の清水」と呼ばれ、今もきれいな水をたえて、青い空を映しています。

この清水のある旧・白沢村の和田地区の名も椀田に由来するといわれています。清水の近くに和田小学校がありますが、もしかしたら子供たちの中に又造とみよの子孫がいるかもしれませぬ。

扇やから「あんない

■二次会処「まんざくの花」へどうぞ

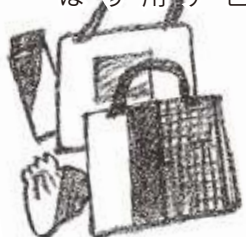
ご夕食の後は、二次会処「まんざくの花」で夜長の季節のひとときをお過ごしになりませんか？

お二人でゆつくり語りあう、ご家族やお友達と盛り上がる、おひとり静かにカクテルグラスを傾ける…思い思いのゆたかな宵をまんざくの花のマスター・服部宏明が同伴いたします。



■人気！手作り麻バッグ&小物

奈良の老舗・中川政七商店の手作り製品―麻のバッグ、スリッパ、ポーチ、はし入れ、ブックカバーが、センスと品質にこだわる方々に人気です。麻の湿りと落ちついた色合い、シンプルなデザインは、長く愛用できる一級品。贈りものにもぎつと喜ばれます。



■会津産はちみつ揃いました

この春から秋に会津の野山で採れた、はちみつが揃いました。コシアブラ、キハダ、栃、そば、萩など、他所

ではなかなか手に入らないユニークなはちみつばかり。ふたをあけると、それぞれの花の香りがほんのり、心まで包んでくれています。おみやげにおすすめてす！



★ペア宿泊券をどうぞ

★大切な方、親しい方へのあつたかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券（お二人でご一泊3万円）はいかがでしょう。忘年会・新年会が落ちついて、静かな1月中旬から2月は、とくにゆつたりお過ごしいただけますので、心に残るプレゼントとなるでしょう。

岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館

あだたらの宿 扇や

福島県二本松市岳温泉1-3  
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004

元気なスタッフがお待ちしております。